

〔研究ノート〕

学校英語か実用英語か(その3)

長谷川 恵 洋

本稿は前号「学校英語か実用英語か(その2)」(『阪南論集』人文・自然科学編, 22巻, 4号)に引き続き, 目次のⅢの3および4について述べる。

Ⅲ 学校英語と実用英語

3. 大学入試と英語

* 受験英語を存続させるべきか否か

Iの1「平泉・渡辺論争」のメインテーマの一つは, 英語を大学入学試験の科目として存続させるか否かということであった。渡辺氏は存続論であり, 英語が大学における修学適性度を測るためのバロメーターとして最適であることをその理由としておられる。現在, 英語はほとんどすべての大学で入試の必修科目とされているが, それは, 英語の成績が他の教科に比べて入学後の成績との相関度がきわめて高いからである。外国語の習得には日常の地道な努力が必要であり, 一夜づけではなかなか良い点がとれない。語学に良い成績をおさめるということは, 真面目な勉強家であることを証明するものである。また, 学問研究を行っていく上で最も大切な資質の一つである論理的思考力も, 外国語の学習によって養われるものである。

これに対して平泉氏は, 英語を受験による強制によって学習させることは良くないという立場に立ち, 次のように論じておられる。現在の大学入試は, 大学教育を受けるだけの能力を有するか否かを認定するための試験ではなく, 戦前では想像もつかなかった多数の大学入学希望者を「ふるい落とす」ためのものである。学科

能力を単に受験者をふるい落とすために利用するということは, 実に危険なことであり, また大学人のモラルに反することでもある。現在のような受験体制のもとにおいては, 単なる学科能力を利用することによって, どこまで受験生の本当の能力をテストできるかは疑問である。さらに氏は, ある学科が受験科目に利用されれば, その学科自体がダメージを受けることになるとして, 次の様に述べておられる。

実はもっと重大なことは, 利用された“学科”の受ける“被害”なのである。

受験の対象科目にえらばれる栄誉を担った「学科」は, その瞬間からもはや「学問」であることをやめる。生徒にとって, それはもはや, あの魅力に輝く好奇心と愛情と尊敬との対象では「永遠に」なくなるのである。なるほど, 生徒は熱心に勉強するであろう。参考書はとぶように売れるであろう。担当の先生方は父兄から大事にされるであろう。しかし, そこはどこかの国の公認イデオロギーの教科のような灰色の重圧が重くのしかかってくる。「学問」はそこには消える。残るのは救いがたい精神の荒廃である。

英語こそは大学入試の花形である——という人がある。これからの日本にとってかけがえのないほどに大事な知識の一つである外国語, なかんずく現代世界での最大の国際語である英語を, そんなことにしてしまっているのだろうか。大学の都合で, 適当に志望者を「えりぬく」手段として, 「便利」だということで, 英語が利用されているのだろうか。そもそも国民教育における外国語とは何なの

ろうか。

英語の学習を真理の探究からそらしてはいけないという平泉氏の見解は、一見したところ非常に崇高な響きをもっている。しかし深くつきつめてみると、その見解は単なる理想にすぎない。そもそも、人は必要にせまられなければわざわざ外国語の学習などしないものである。世界中を見渡してみても、外国語ができる人というのは、たいてい、どうしてもその言葉をしゃべらなければ生活に支障をきたすとか、その言葉をしゃべると経済的に得をするとか、過去において他の国家や民族によってその言葉を強制されたとかいうようなケースばかりである。東南アジアの人々が英語を勉強するのは、英語を知らないと、商社マンはもちろんホテルのボーイにもなれないからである。スカンジナビア諸国の人々にとっては、英語は彼等の文化と深く結びついたものであり、日常生活と切り離すことのできないものである。日本人は幸か不幸か外国人によって政治的に外国語の学習を強制されたことがない。それは恵まれた状況だと言えるが、その反面、日本人が外国語べたであることの原因でもある。

我が国の学生に英語学習の目的は何かと聞いてみると、入学試験科目に英語があるからだというのが、最も素朴で正直な返事であろう。それがホンネであろう。受験という強制力によって英語を学習させることに問題がないとはいえない。語学が非常に嫌いだという人にとって、義務教育で英語を強制的に学習させられ、入学のための選抜の手段として英語が用いられるということは、まったく理不尽なことであろう。しかし、入学試験が日本人に英語を勉強させる大きな原動力となっていることは事実である。

* 学校英語落伍者のルサンチマン

我が国は学歴社会であり、一流大学に入るかどうかが生涯に大きく左右する。その選抜の手段として英語が用いられているということは、学校英語がにがてな人にとっては、まさに怨念であろう。その人達は当然入試英語および学校英語廃止論に傾く。学校英語は役に立たない偽

の英語であり、真の価値をもった英語である実用英語とはまったく別のものであるという声がどこかでささやかれば、学校英語に悩まされてきた人は誰でもその声にとびつくであろう。もしかりにその声が正当であったということになれば、その人々は、理不尽な入試制度や学校制度の犠牲者だったということになるのである。悪いのは努力の足りなかった自分自身ではなくて、偽の英語を教えた学校英語教育だということになるのである。自己暗示でもよいから、そのように信じた方が気分的に楽になれるというものである。渡辺氏は、学校英語教育の落伍者の中には、そのルサンチマン (ressentiment) すなわち怨念を晴らすために外国へ行く人達があるとして、次の様に述べておられる。

中学・高校の教員と多少やった経験からいいますと、学校でしゃべらない英語で満足し切れなくて飛び出るなんて女のコがいたら、それはしゃべらない英語ができないコです。ところが、しゃべらない、漢文型の英語に対する世の中の批判が高いことは、何となく知っているわけ。だから、私たちよりも勉強できるコたちは、しゃべらない英語をやって有名な大学へ入ればいいじゃないの、私はあいつらができないしゃべる英語をやるんだわよと、ルサンチマンで外国へ行くから、知能指数がグンと低い女子が相当数外国へ行っているはずです。(渡辺昇一・松本道弘、『英語の学び方』, 実業之日本社, 1980, p. 164)

入試英語・学校英語廃止論のホンネを考えてみよう。従来、廃止論の理由づけとしては、学校英語は、末しょう的な文法事項にこだわっているために、本来の実践的な英語能力を身につけるのに役立っていない、と言うようなことがさげばれてきた。確かに学校英語は完ぺきなものではない。しかし、それを是正するには学校英語の内容を改善すればよいのであって、廃止する必要はない。学校英語がすべての人にとってまったく害あって益なしというのであれば廃止すべきであるが、学校英語のおかげで英語が

できるようになったという人も多いはずである。学校英語落伍者のルサンチマンの声があまりにも大きいので、世間の人が、あたかも学校英語が有効に機能していないかのような印象をもつようになったのではないか。入試英語・学校英語廃止論のホンネは、実はこの学校英語落伍者のルサンチマンの声ではないだろうか。学校英語が英語学習に有効に機能していない云々と言うのはタテマエ上の理由であって、ホンネは、このルサンチマンの声をいかになだめて満足させるかという点にあるのかも知れない。

* 入試英語について

順当な考えから言えば、まず英語教育があって、しかる後にその終極点としての入試英語があり、入学試験は各人の英語修得度の結果を計るための手段であって、それ自体が目的でない、ということになるであろう。あくまでも目的は英語教育そのものであり、そこにポイントが置かれるべきであるというのが本来の考え方であろう。しかし受験生のホンネはその逆である。あくまでも入学試験の問題そのものがかなめである。まず入試問題についての予想がなされ、それに従って高校・中学における英語学習の内容が定ってくるというのがホンネであろう。例えば、今日の国際化社会においては耳からの英語が重要視されているが、その事を何人もの英語教育関係者がくりかえし唱えるよりも、たった一言、大学側が、ヒアリングに関する出題をすると宣言した方が、学生が真剣にヒアリングの訓練をするためのはるかに大きなモチベーションとなるであろう。

平泉 試案では、学校英語教育の廃止と同時に、入試英語の廃止も唱えられていた。しかるに、文部省は、中学校英語週三時間制によって学校英語教育の縮少は行ったが、入試英語の縮少は行なわなかった。しかしそのことがより混乱を生じさせる結果となった。学校英語の廃止と入試英語の廃止はセットになっているのである。学校英語廃止案を支持する訳ではないが、もしそれを遂行するとすれば、学校英語教育のホンネという点からのかなめである入試英語を

まず排除する必要があったのである。入試英語をそのまま存続させておいて英語授業時間数の削減だけを行ったが、それが多数の中学生・高校生の塾通いという現象を生み出し、学校教育に混乱を生じさせたのは当然の結果である。

理想から言えば、受験などで強制することなく、英語に対する真からの興味によって英語を学ばせるべきである。受験の強制力をかりて無理に英語を勉強させるとするのは邪道のような感じさえる。しかし実際問題として、入試に英語を課することが、はからずも、我が国の学生に真剣に英語を勉強させる最も有効な要因となっているのである。入学試験という英語学習のための大きな原動力をあえて放棄する必要はないと思われる。入試制度に問題がないとは言えない。社会的なひずみが生じる原因ともなっている。平泉氏は、「わが国において、語学のできる、できないという種類のことがパッションネットな議論になりやすい。それはコンプレックスにつながっているのです。」(『英語教育大論争』p. 162)と述べておられるが、これも入試英語がその原因の主体となっていると思われる。しかし現在の日本社会において、受験生や教育ママのエネルギーが、国民全体がそこそこの英語力を身につけるための最大の原動力となっていることは事実である。我が国が、まぎれもなく経済的・文化的に国際社会の摩擦の中に置かれているにもかかわらず、国際的に孤立した言語状況のもとにあるために、各人の英語学習のモチベーションがファッションの域を出ないことを考えた場合に、受験生や教育ママのエネルギーを利用するのはやむをえないことかも知れない。

4. いかにして学校英語と実用英語を結合させるか

* 学校英語と実用英語は別物ではない

学校英語と実用英語は世間で言われているほど別物ではないというのが私見である。しばしば両者は相反するもののように言われるが、それは後者が前者のアンチテーゼとして人々の意

識に上ってきたものだからであろう。そもそも、学校英語と実用英語という二つの異った種類の英語が存する訳ではない。

日本人の場合、大部分の人は学校英語から英語の世界に入る。学校英語を否定する人も、実は学校英語からスタートしている人がほとんどなのである。学校英語はにがてだったが実用英語は得意だという人も、自分では気づいていないかも知れないが、実は学校英語によって英語の基本的な文法構造を認識してから実用英語を身につけたのである。もし、学校英語はまったく何も解らなかったけれども、実用英語には自信があるという人が居れば、それは嘘である。あるいはその人自身の錯覚である。英語の基本構造を理解していなくてもファッションとしての英会話の雰囲気にはひたることはできる。しかしそれは本来の言語活動とは言えない。

実用英語はできるが学校英語はできないという人は存しない。しかし、学校英語はできるが実用英語はできないという人は存する。それは、学校英語の学び方あるいは教え方が誤っていたからである。それが誤っていた為に、学校英語が実用英語へとつながっていかないのである。どのような点で誤っていたのか。二つのことが考えられる。一つは、訳読式教授法が正しく行われなかった点であり、もう一つは、音声面の教授がおろそかにされていた点である。

* 訳読と言語構造

我が国の伝統的な英語教授法は訳読中心である。英語学習過程において、英語を日本語に訳すこと自体は悪くない。ただし、英語を理解することと英語を日本語に訳すことは、必ずしも同じではないということを銘記しておくべきである。英語の意味内容を十分に理解してなくても、それなりに日本語に訳すことができる。また逆に、英語を理解していてもうまく日本語に訳すことができないこともある。英語を翻訳するということは、英語を理解することとは異ったまた別の一つの技術なのである。よく、日本語に訳してから英文の内容を理解しようとする人や日本語に訳さなければ英文の内容を理解

したような気になれない人がいるが、それは順序が逆である。先にもとの英語を英語のままに理解し、その後で日本語に訳すのである。

いま一度、訳すという過程がいかなるものであるかを考えてみよう。訳には直訳と意識がある。直訳とは、原文の一語一語の語句に忠実に訳すことであるが、要するに、個々の単語を日本語に置きかえてそれを日本語の語順に並べかえることである。意識とは、一語一語の語句より、むしろ原文の内容全体に重点をおいて訳すことである。直訳は意識に比べて日本語として不自然なものになることがある。イデオムの場合のように、直訳では訳しきれなくてどうしても誤訳になってしまうこともある。しかし外国語の学習の初歩の段階においては、あえて直訳することが必要である。それは、外国語の文法構造を認識するためには、まず直訳することによってその外国語と格闘することが必要だからである。意識はその次の段階として行われるべきである。

言語構造は次の三つのレベルから成る。第一のレベルは「音素」(phoneme)であり、第二のレベルは「形態素」(morpheme)であり、第三のレベルは「統語法」(syntax)である。「音素」とは、物理的には限りなく存在する種々の音声の中で、ネイティブ・スピーカーが、母国語の音声体系を構成するために弁別している最小の音声の単位である。「音素」は同時に、形態素を構成するための最小の意味の要素でもある。「形態素」とは、専門の言語学者が、独立した最小の意味の基本単位として設定したものであるが、いまここでは、「単語」(word)というもっと一般的な単位を用いることにする。言語学者に言わせれば、「単語」は形態素より上位の単位であり、意味の最小の単位ではないが、日常の言語活動において、人は意味の基本単位を言語学者のように厳密に分析している訳ではない。むしろ、ネイティブ・スピーカーが一回過程で認識していると思われる意味の最小の単位は、単語もしくはそれよりも広範囲の形態的要素であろう。「単語」は、言語研究のた

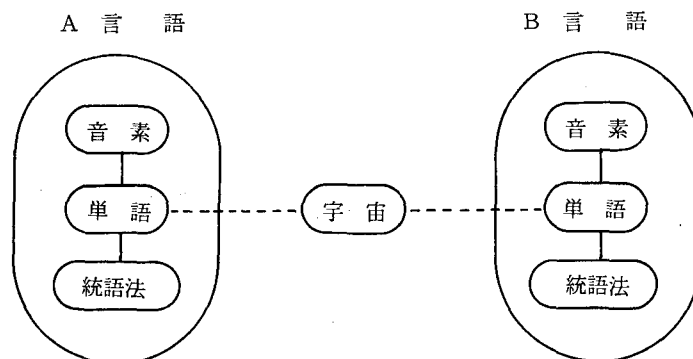
めの単位としてはその定義があいまいであるが、外国語学習に際しての意味の基本単位としては、辞書が単語を項目の単位としていることなどから鑑みて、最も適切と思われる。「統語法」とは「単語」の並び方のルールである。言語構造とは、音素・単語・統語法の三つが有機的に絡みあうことによって構成された構造体であるが、そのあらましは次のように述べることができる。まずいくつかの「音素」が集ることにより「単語」という意味の基本単位が形成される。次に、いくつかの「単語」が「統語法」のルールに従って配列されることにより、さらに上位レベルでの意味構造が形成される。この時、一単語を形成する各音素は、単にじゅず玉が並ぶように並置されるのであるが、各単語は単に並列的に並ぶのではなく、ある単語はある単語に対して従属的であったり、ある単語は他の単語よりもある単語とより密接に結びついていたりするのであり、その配列は階層的である。「統語法」とは、そのような階層的配列構造により多様な意味構造を形成するためのルールである。

* 英語の文法構造を理解するためには単語レベルで日英語を対応させるのが良い

各言語は、音素・単語・統語法の三つのレベルにおいてそれぞれ独自の構造を持ち、独自の体系を形成している。したがって、二つの異った言語の音素・単語・統語法の形態的構造は、元来たがいに独立した別個の存在である。しかるに、英語を日本語に訳す場合に、どこかのレ

ベルで無理にでも重ねあわせる必要があるのであるが、それは単語のレベルにおいてであると考えられる。なぜならば、各単語はその一つ一つが基本的には宇宙の諸事象・諸概念と結びついたものであり、宇宙というものを基点とすることによって、A言語の各単語とB言語の各単語を重ねあわせることができるからである。A言語とB言語とでは、各単語の宇宙との結びつき方は異っているが、そのずれを考慮しながら、A言語の各単語をB言語の各単語に置きかえていくのである。もちろんずれがあるからA言語の一単語は必ずしもB言語の一単語と対応するとは限らないが、たいていは一対一で対応させることができる。

A言語とB言語を対応させるのに単語レベルが良いと考える理由はもう一つある。先述のように、音素の配列の構造は並列的であり単語の配列の構造は階層的である。すなわち、一単語内における音素の配列は、その組み合わせが一通りであり全体としてただ一つの意味をもつのであり、一単語内の各音素はそれぞれ独立の意味をもっていない。それに対して、文レベルにおける単語の配列とは、独立した意味をもった要素である単語というものを、その言語独自の統語法のルールによって組み合わせることによって、より多様な意味構造を形成するものである。したがって、単語レベルでA言語をB言語に変換した場合、両言語の単語の内部の形態的構造は互いに完全に独立していて影響しあわないのであり、単語内部形態構造の相違による意



味のずれは生じない。一方、文レベルにおいては、各単語の辞書的意味 (lexical meaning) と単語間の構造的意味 (structural meaning) が錯そうしている。とくに、日本語と英語のように語系が異なる場合は、構造的意味のずれが大きい。文レベルで英語を日本語に変換する場合には、そのずれを文法の知識によって認識する必要がある。

いま、単語レベルの変換においては、各言語の内部形態構造の相違による意味のずれは生じないと述べたが、それは正確に言えば辞書的意味に関してのみである。各単語には辞書的意味のみならず構造的意味が含まれている。上図で示したように、単語は音素と統語法の双方に関連しており、一単語の中には統語機能に関係した形態的構造が内蔵されている。それらの部分については、英語と日本語は対応しないし、また翻訳できないことが多い。それらは単語レベルだけで考えないで、むしろ統語法との関連において認識しておくべきである。例えば、He likes dogs. において、likes の s は三人称・単数・現在を表わし、dogs の s は複数を表わす。これらのことは、適切な日本語に訳すことはほとんど不可能であるが、英語統語構造の一環として、理解しておくべきことがらである。

* 英語を英語のままで理解するとはいかなることか

先に、英語を日本語に訳す前に英語を英語のままで理解する必要があると述べたが、これは、Ⅲの2の「* 成人の外国語学習に direct method は用いるか」で、成人が英語というまったく語系の異なる外国語を学習する場合には日本語の訳語を対応させた方がずっと早いと述べたことと、矛盾しているように思われるかも知れない。

英語を英語のままで理解するというのに二つのレベルがある。単語のレベルと文のレベルである。ネイティブ・スピーカーにより近い状態は、単語と文の双方のレベルで英語を理解することであるが、英語学習の初歩の段階や、その英単語に初めて遭遇する場合には、文レベルに

おいてのみということになる。すなわち、まず単語レベルで日本語に訳し、それを英語の語順のままで理解してから、日本語の語順になおすというプロセスである。ただし、このように日本語を英単語に対応させるのは、あくまでも初めて遭遇する英単語の意味内容を把握する手段としてであり、意味が解かれれば、できるだけすみやかに日本語の訳語を切り離し、単語レベルにおいても、日本語を介しないで英語を英語のままで理解するのが望ましい。

英語を英語のままで理解するということは、英語学習過程において、ごく自然に習慣として身につけるべきことであるが、そのような習慣を身につけることが、非常に努力を要することのように思っている人がある。文レベルにおいて、その訓練の方法は、英語の語順のままで理解するように努めるということにつぎるが、単語レベルにおいては、いかに行なえば良いのだろうか。それには、英単語にいったん結びつけた日本語を捨象する必要があるが、それは、文レベルにおいて英語を英語で理解するというプロセスをくり返している、とくに意識的にならなくても自然になされる。

そもそも、言語とは意味と形態から成り立っており、単語を理解するということは、単語の形態を認識し、それに結びついた意味をただちに想起することと考えられる。すなわち、単語レベルにおいては、一つの形態に一つの意味が結びつくのが原則である。しかるに、英単語を日本語に変換して解釈するという状況においては、一つの意味に日本語と英語の二つの形態が結びついていることになる。それは自然な言語活動とは言えない。だいいち、英語で会話したり本を読んだりするのに、いちいち日本語に変換していたのでは、とても時間的に間にあわないし、また自由に思考を展開することもできない。

各単語は、あるコンテキストの中で、他の単語との結びつきにおいて存在している。先に、単語レベルの意味が階層的に結びつきあうことによって、文レベルの意味が成立すると述べた

が、逆に、各単語の意味は、文全体のコンテキストの中で決定されるものでもある。すなわち、一つの単語が複数の意味を有する場合には、あるコンテキストがそのいくつかの意味の中からただ一つの意味を決定するのである。(比喩的表現などでは、同時に複数の意味が共存することもある。)

我々は、日本語の単語を覚える際に、いちいち辞書を引いて単語の意味を確かめている訳ではない。あるコンテキストの中でその単語の意味を推定して、それで全体のつじつまがあえば良しとしているのである。同様のことが、英語学習についても言える。はじめ、個々の英単語を理解するために、日本語の訳語を対応させても、それらの英単語を英語の語順に並べて、英語のコンテキストの中で理解するというプロセスの中で、各単語同志が意味的に相互関係を持ち、各単語の意味はその相互関係の中で決定される。そして各英単語と日本語のつながりは自然に捨象されてくる。それが言語活動として自然だからである。

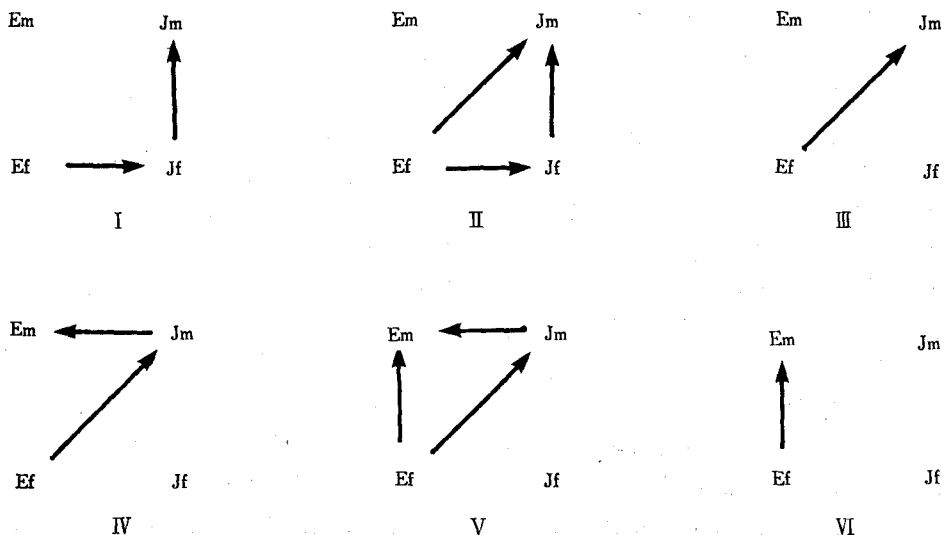
先述の direct method は、コンテキストに依存した教授法と言える。ただし direct method は、語系・文化圏が著しく異なる場合には、思わぬ誤解の生じることがある。その危険

をさけるために、てっとり早く英単語の意味を推定する目的で、日本語の訳語を対応させるわけであるが、英語と日本語とでは語彙の体系が異なっているために、かなりの意味のずれが生じることになる。場合によっては、コンテキストが英語であり語彙体系が日本語であるという不自然なことになる。しかし、各英単語の意味は、日本語の訳語によって与えられた意味から、しだいに、英文全体のコンテキストの論理性を満たす意味へと移行してくる。すなわち、日本語を介さない元来の英語の意味に近づいてくる。このように考えると、コンテキストによる修正があるから、最初、日本語に変換した意味で解釈しても、大丈夫だと言うことにもなる。

* 単語レベルでの日英語の対応のモデル

以上、英語学習過程において英単語を日本語の単語に対応させることについて述べたが、これは図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵのようにモデル化してみることができる。言語は意味(meaning)と形態(form)とから成るが、ある一つの英単語の意味を Em, 形態を Ef, それに対応する日本語の単語の意味を Jm, 形態を Jf とする。

Ⅰ：英単語の形態 Ef を、辞書などを用いるこ



とにより、日本語の単語の形態 Jf と対応させる。Jf はその意味である Jm と結びつく。

II : I の Ef→Jf→Jm において、Jf→Jm は、Ef→Jfの結合がある以前から、あらかじめ結びついている。すなわち、Ef が Jf に結びつく時点において、Ef は同時に Jm にも結びつく、したがって、Ef→Jf→Jm というルートと同時に、Ef→Jm というルートが生じるということは、容易に考えられる。

III : II において、Jm という一つの意味に、Ef・Jf という二つの形態が結びついていたが、これは言語活動として不自然である。Ef→Jm というルートであれば、一つの形態に一つの意味が結びつくことになり、より自然である。

IV : Jm は日本語の語彙体系の中で決定される意味であるが、これは英文のコンテキスト内での論理性を満す意味 Em に移行する。

V : Ef→Em という結合は、英語の言語構造の一環として、Ef→Jm および Jm→Em 以前に存している。Ef→Jm→Em というルートは便宜的なものであり、ある英文のコンテキストの中での英単語の意味が Em であることが発見されると、すぐに、Ef→Jm→Em というルートは捨象されることになる。

VI : Ef→Em はネイティブ・スピーカーの言語活動そのものである。ただし、ネイティブ・スピーカーは、いくつかのコンテキストにおける Ef→Em の結びつき、すなわち Ef→{Em₁, Em₂, Em₃……} を認識している。我々も、いくつかのコンテキストにおいて Ef の意味を考えることによって、{Em₁, Em₂, ……} を増やしていくことになるが、いったん一つの Em を認識した後は、Em 同志の連想も働くことになる。

以上のモデルは、単語が最小の独立した意味の単位であることを前提としたものであるが、先述のように、ネイティブ・スピーカーの言語活動・言語認識過程は、必ずしも単語を最小の意味の単位とはしていない。むしろ、一回過程で認識される意味の範囲は、もっと広範囲で

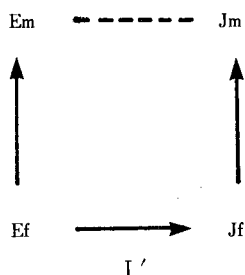
あることが多いと考えられる。喩えれば、点描派の画家は、青と黄を並置することによって緑を表現するが、この場合の青と黄をそれぞれ一つの単語と考えてみるとよい。たいていの人は、青と黄を別々に認識しないで、緑として一回過程で認識している。たいていの人は、各単語を全体的な流れとしてトータルに把握しており、言語学者が分析するように、詳細に一つ一つの単語の意味を把握している訳ではない。III の 1 の「*実用英語の難しさはヒアリングにある」において Fokachopsticks の例で示したが、ネイティブ・スピーカーは、各単語の切れ目がどこにあるか、明確に認識していないことさえある。とくにイデオムなどの場合は、ある一定の単語の組みあわせが慣用化されたために、表現全体としての意味の認識が先行し、その表現を構成する個々の単語の意味の認識が明確になされず、その為に、個々の単語の意味を総合したものと表現全体の意味がずれてしまったと考えられる。

上記のように、ネイティブ・スピーカーの言語認識過程は、必ずしも単語単位で行なわれているのではない。しかし、言語構造というものが、単語を独立した意味の単位として成立している限りにおいて、外国語を習得するためには、図 I ~ VI のようなモデルで個々の単語の意味を認識していくことが必要であると考えられる。点描派の画家の喩えをくりかえすが、青と黄を認識することによって緑を把握するということがなければ、次に、青と赤を並置したときに紫が生ずるということが把握できない。

我々が日本語を用いる際にも、時には単語レベルにもどって考えることが必要かも知れない。我々の思考の流れは、単語より上位レベルで行なわれているが、気の付かないうちに、個々の単語の意味が相互にずれてしまっていて、極端な場合には、単語同志が意味的に矛盾してしまっていることもある。我々は、日本語に慣れているために、かえってそのような矛盾に気が付きにくい、単語レベルにもどることによって、その矛盾を明確にして是正することができる。

単語レベルにもどることは、同時に日本語の統語構造を再確認することでもある。

Ⅲの2の「*橋渡しとしての英語力」でも述べたが、我々が英語を学習する際には、一見、矛盾するようであるが、できるだけ日本語を離れて英語だけで思考する訓練と同時に、日本語とのつながりにおいて英語を考える訓練をする必要もある。英文の内容を自分だけで理解するのであれば、日本語を介入させない方が良いが、いったん理解した英文を他の日本人に説明するためには、どうしても、英語に匹敵する日本語を想起して構成する能力が必要となってくる。すなわち、上記のⅠ～Ⅵのモデルにおいて、いったんⅠからⅥまでの各プロセスが完成してから、逆にまたⅠにもどることになる。ただし、Ⅰとまったく同じではない。Ⅰにおいては、英単語に匹敵する日本語を、辞書などを用いることによって単に機械的に対応させた訳であるが、いったんⅠの段階に達している訳であるから、まず英単語の意味を英語のままで理解し、英文全体のコンテキストの中での意味を把握した上で、最もそれに匹敵した日本語を選び出すというプロセスになる。その様子は、図Ⅰ'のように表わすことができる。



Ⅰ' : Ef からその意味 Em が連想される。それと同時に、Ef に対応すると思われる日本語 Jf が連想される。Em と Jm をくらべて、あるコンテキストの中での意味として両者にあまりずれがなかったら、Jf が Ef の訳語として適切ということになる。

* 日英語の音声構造の相異点

すでに何度か述べたが、英語の音声構造は日本人にとってかなり難かしいものと言える。学

校英語が実用英語に結びつかない最大の原因はそこにあると考えられる。日本人にとって困難と思える日英語の音声構造上の相違点をいくつか挙げてみる。

- 一 音素体系の相異
- 二 音節構造の相異
- 三 強弱アクセント
- 四 リズム構造の相異
- 五 子音の浮動性
- 六 母音の浮動性（強形と弱形）

上記のそれぞれについて説明する。

一 音素体系の相異

初めて外国語を学習する者は、音素の概念そのものを認識していない場合が多い。日本語と英語は、音素の弁別の体系が異っており、英語には、日本語に存しない音素が存する。たとえば、[æ] という音素は、アとエの中間の音などと説明されるが、これが、英語の音素体系の中でのみ成立するところの、アでもなくイでもない別の一つの音素であることを、まず認識する必要がある。

我々日本人が、英語の各音素を日本語の音素体系に影響されないで認識するということは、かなり難しいことである。無意識のうちに、英語の音素が、類似した日本語の音素で代用されているようなことも多いと考えられる。また、かりにそのような代用があっても、たいていの場合は、たいした誤解もなくそれなりに通じるものである。それは、音素レベルで多少のずれがあっても、それよりもっと上位レベルでつじつまがってしまうからであろう。

しかしそれでも、英語の音声構造を把握するために、英語の各音素を英語の音素体系の中で認識するように努力することは必須である。それは、音素が、意味弁別のための基本的かつ究極的な形態的要素だからである。ただ、以下の項目で述べるように、英語の各音素は、日本語の音素と比べて不安定であり、日本人にとってはかなり把握しにくいものと言えるであろう。事実、英米人が日本語を学習するのと、日本人

が英語を学習するのを比べると、各音素の発音と聞き取りに関しては、前者の方が一般的に上達のはやいようである。

二 音節構造の相異

先述のように、日本語の音節は英語と比べて安定している。日本語の音節構造のパターンは、原則として CV (一子音 + 一母音) または V (一母音) であり、常に母音で終わる。これに対して、英語の音節は、母音の前に子音が三つまで、後には四つまでつき得るのであり、CV (例: see), CVC (put), CCCVC (strike), CVCCCC (tempts) など、さまざまなパターンがある。

三 強弱アクセント

英語は stress accent (強弱アクセント) である。我々日本人は、日本語の pitch accent (高低アクセント) に慣れているが、英語のスピーキングやヒアリングの能力を身につけるためには、ぜひとも、英語の強弱アクセントがいかなるものであるかを認識しておく必要がある。強弱アクセントは、単に単語レベルや文レベルでの意味の弁別の要因として機能しているだけでなく、英語の発話のリズムを構成する要因となっている。

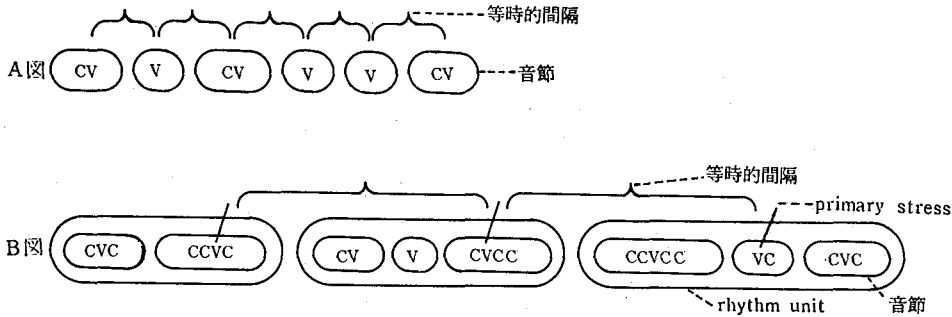
四 リズム構造の相異

英語は stress-timed rhythm (強勢のリズム) であり、日本語は syllable-timed rhythm

(音節のリズム) である。二で述べたように、日本語の音節パターンは CV または V であり、英語と比べて単純で安定している。日本語のリズムは、この安定した音節が等しい時間的間隔で並ぶというものである。(cf. A図) 英語の場合、さまざまなパターンの音節が並ぶことになるが、それらが一定のリズムを構成するためには、三で述べたように、英語が強弱アクセントであることが大きな役割をはたすことになる。英語のリズムは次のように説明される。いくつかの音節が並び、その中のある音節の母音が、とくに強いストレス (primary stress と称する。cf. B図) で発音される。この強いストレスのおかれた母音が中心となり、いくつかの音節がひとまとまりとなる。(このまとまりを rhythm unit と称する。cf. B図) 英語のリズムは、この rhythm unit によって形成される。すなわち、rhythm unit の中心である primary stress が時間的に等間隔で出現することによって形成される。ただし等間隔と言っても、物理的に正確に等間隔と言うわけではなく、それはむしろ話者や聞き手の心理的あるいは生理的なものである。

五 子音の浮動性

二で述べたように、日本語の子音は必ず CV というパターンを形成する。すなわち、各子音は必ず後続する一母音に支えられた形で登場するのであり、二つ以上の子音が連続して生じることがなく、音節が子音で終わるという



ことがない。このような日本語の子音は、物理的に安定していると言える。一方、英語の場合は、音節パターンがさまざまであり、複数の子音が連続して生じることが多く、音節が子音で終わることも多い。このために、英語の子音は、音素として同一のものが、環境によって物理的にかなり異った様相を示す。たとえば、破裂音は、語頭に出現するときは aspiration (帯気) を伴った破裂となり、語尾に出現するときは、閉鎖の持続だけで打ち切れ、破裂のための開放を伴わないことが多い。さらに語尾の破裂音も、その次に母音で始まる語が後続する時は、その母音と liaison (連読) して、語頭の破裂音と同じ様相を示すことになる。子音は、発声器官(唇・歯・歯茎など)の作用(破裂・摩擦など)があるので、その点を明確に説明してもらえば、未知の子音もその調音の仕方を把握することは比較的容易である。日本人にとって英語の子音が認識にくいのは、むしろ、英語の音節構造にからんで、各子音が浮動性を示す点にあると言える。

六 母音の浮動性(強形と弱形)

英語の母音は不安定である。日本人に日本語の母音の数はいくつかとたずねると皆んな五つと答える。英語のネイティブ・スピーカーに英語の母音の数を聞いてみると、答えられなかったり人によって数が違っていたりする。英語の母音が不安定なのは、英語が強弱アクセントであることに関係していると考えられる。強い音節の母音は固有の音価を保つが、弱音節の母音は固有の音価と中央母音 [ə] (中舌母音、あいまい母音) との中間の音であり、そこには無限と言える段階がある。強弱のリズム構造をその背景とした英語の母音はかなり浮動的であり、安定した音節構造に支えられた日本語の母音とはかなり異った様相を示している。

英語母音の浮動性は、助動詞・代名詞・前置詞などの機能語においては、strong form (強形)・weak form (弱形) という形で表われる。一般的に機能語は、単独で発音されたときは

strong form をとり、文中で発音されたときは weak form をとる。ただし文中であっても、強勢を受けたときは strong form をとる。強形と弱形は、例えば am: [æm]; [əm], [m] や have: [hæv]; [həv], [əv], [v] のように、かなり形が異なるが、強勢を受けない母音の中央母音化さらに無母音化として説明することができる。強形と弱形は、結果としては母音の様相の変化という現象であるが、その現象の根源は英語の強弱のリズムにあると言える。したがって、これに慣れるには、それぞれの形を単独に把握するより、英語特有のリズムの中で把握するほうが有効であろう。

以上、英語音声構造の概観を、日本語音声構造との比較において説明した。六つの点を列挙したが、それぞれは独立しているのではなく、有機的に深く関連しあっている。英語が強弱アクセントであることは、英語のリズムの形成および母音の浮動性の根本的な要因となっている。また、子音の浮動性は、英語の音節構造と密接な関係にある。これらのことは、単なる知識として理解するだけでなく、実際に英語の音声に何度もふれることによって習得していくべきことであるが、幼児期を過ぎてから外国語として英語を学習する場合には、英語の音声体系やリズム構造がどのようなものであるか、また日本語のそれとどこに異っているかということについて、あらかじめ説明しておいた方が認識しやすいと考えられる。丁度それは、統語構造を理解するために文法の説明が必要であるのと同じことである。しかるに、従来の学校英語教育においては、英語音声構造についての体系的な説明およびシステマティックな指導がほとんどなかった。

幼児期に母国語の音声にふれるのは無意識過程である。母国語の音声構造は、意識しなくても自動的に頭の中にくみ込まれる。しかし、幼児期を過ぎての外国語の発音練習やヒアリングの訓練は意識的になされる必要がある。すなわち、ただ漠然と音声にふれるのではなく、音素概念についての認識や音節構造についての把握

がなされた上で音声にふれた方が、音声を正しく能率的に把握することができると考えられる。

ただし、誤解がないように念のために述べておくが、概念的な説明はあくまでも手段であり、それ自体が目的ではない。音声学習そのものは、実際に何度も声を出して発音したり、英語のテープを聞いたりすることによって行なわれるのであり、説明はあくまでもその際に注意すべきポイントをおさえるための手段である。音声学習に音声についての説明が必要なのは、文法構造の習得に文法についての説明が必要なのと同じことである。統語構造を習得するための

訓練そのものは、できるだけ数多くの英文にふれることであるが、その訓練を能率的に行なうためには、あらかじめ適切な文法的説明をしておかねばならない。音声の習得そのものは、あくまでも訓練をくりかえすことによるが、幼児期を過ぎてからの外国語学習において、その訓練は単なる試行錯誤によるものではなく、何んらかの方向づけが必要である。その方向づけを正しく行なうためには、適切な説明によってあらかじめ英語音声構造についての概念的な把握を充分にしておく必要があると考えられる。

(1987年5月11日受理)